

近くに日本軍従軍看護婦の宿舎があった。彼女らも行軍で移動したとのこと、大変苦労したと思う。

この收容所は監視、食事等恵まれていたと思う。

昭和二十一年五月バンコックに到着。乗船した船は海防艦を改造した船で大竹港に入港、瀬高駅から歩いて家路についた。

妻は復員局まで出向いて安否を尋ねたらしいが「ビルマの戦闘は全滅状態なので返事のしようもない」との回答であった。戦死したものと思つて覚悟はしていと喜んでくれた。

現在は町の社会福祉協議会会長として働いて、入院加療中の妻を見舞つて元気で暮らしている。

## 獣医として

### ビルマ諸作戦に参戦

福岡県 河野 要

私は大正五（一九一六）年五月、福岡県に生まれま

した。

軍歴を申し上げますと、昭和十六（一九四一）年に久留米西部第五十四部隊に入隊、十一月には陸軍予備役獣医師見習士官を拝命しましたが、同日、南支派遣軍第十八師団山砲兵第十八連隊に転属となりまして南支黄埔上陸、同地に駐留、警備に当たりました。

昭和十七年二月にシンガポール攻略戦に参加し、四月にはビルマ・ラングーン上陸しました。十月に少尉に任官しまして、昭和十八年一月にはビルマ最北端のモーニンに移駐し、同地の警備および討伐作戦さらにサンブラバン作戦に参加しました。同年九月には雲南、古勇・古衛作戦、十月にはフーコン作戦に参加しました。

昭和十九年八月、転進命令により交戦しつつ南下し、その間中尉に進級しましたが、昭和二十年六月より最後の陣地シッターで攻撃中、終戦の詔勅が下りました。

大東亜戦争という国の存亡を賭けた戦いに、私達は

軍の命令によりまして、軍隊で受けた大和魂と忠君愛国の精神を持って、東洋平和のためならばとこの大東亜戦争に臨んだのです。当時、日本国民の誰が、この戦争を侵略戦争だと思いつたでしょうか。戦いというものは、敵を殺さねばこちらが殺されるという、この世を超越したものです。

私は軍歴で申し上げましたように、支那事変の末期より南支の戦場に参加していますが、昭和十七年二月にはシンガポール攻略戦に参加し、昭和十八年一月にはビルマ最北端のモーニンに移駐しましたので、このビルマでの体験を記述いたします。

シンガポールを攻略し、息つく間もなくビルマへ進撃、そして、ビルマ最北端のモーニンというところに到着、当地に駐留警備を命ぜられました。

昭和十八年一月二日、三日は新年でもあり、住民の差し入れ等もあって、久方ぶりに故郷の思い出や故郷を思う話に花が咲いたものです。しかし明けて四日には英軍機の猛爆撃を受けまして、一〇余頭の戦傷馬を

出しました。我が軍は山砲隊であり、作戦、行軍には軍馬なしでは絶対動けません。ですから我々山砲隊にとっては馬様々です。このため大隊長は急遽馬の防空壕作りを命ぜられました。その馬の防空壕は二度と作り得ないような二〇〇頭分もある頑強な防空壕で、これを作るのに昼夜兼行で作業を行い、一カ月余りで完成したことが記憶にあります。

モーニン警備中、雲南サンプラン作戦に参加し、モーニンに帰隊しましたところ、大隊長より原住民に対する宣撫工作を命ぜられました。宣撫工作とは原住民に政府や軍の方針を話したり、あるいは住民に心の安らぎをもたらすようなことを行うことで、そのためには何をしたら一番良いかということを話しましたところ、これには原住民に対する治療を施すことが一番効果があるということになり、野口軍医と私は下士官兵を帯同して、各部落を巡回して、村ごとに医療を行ったのです。これは住民に非常に感激され、部落の長よりも感謝や称賛のお言葉をいただきました。そして大隊の将校全員が夕食の懇親会を受ける等、宣撫は

大成功した訳です。

こういうことで宣撫工作を行っておりましたある日、警備地外より「ある夫妻の命が危ない、助けて欲しい」という申し入れがあり、患者が連れて来られました。大隊長は軍医を呼び診察した結果、逆子で、印度の医者が両手を切断したが生まれぬとのことでした。これでは生まれぬはずです。子供はすでに腐れかかっていました。それで野戦の地のことでもあるし、治療がスムーズに行くかどうかを考えました。患者の方は親類、親兄弟、区長さんまでお見えになっておりました。それで、その方たちの了解を得た上で、印度の医者にも立ち会ってもらい、軍医と私で帝王切開の手術をしました。

お腹の子は既に腐敗しており、悪臭の中で手術は三時間半ぐらいで終わり、タンカに乗せて帰しました。たまたま野口軍医が暇をみては馬で回診していましたが、ある日「河野君、余病が出なけりゃ助かるかい」と言いましたので、私は「それはよかったなあ、助かってくれればよいが」と言っておりました。結果的

に一命を取り留めまして、これがまた無言の良い宣撫の例となりました。

八月十五日、南支より勤務していた将兵の満期命令が出ました。私の隊からは十五人ぐらいだったと思いますが、これはビルマよりの最後の帰還兵となりました。この最後の満期内地帰還後のある日、「大隊將校集合」がかり、大隊長より「先日満期帰還した將兵が無事内地に上陸できることを祈りたい」ということを前提として、現在の日本軍の戦況報告（陸海空）はじめ、不利な状況が伝えられました。

そして、「我々残された將兵はこのビルマの地に屍を埋めると思え。内地からの輸送、弾薬、糧秣、將兵の補充も全く無し、今持てるだけで最後の一兵まで戦わねばならん」と大本営からの発表だ。心して次期作戦準備に備えよ」との訓示を受けました。

その晩、將兵には遺書を書かせましたが、決して女々しいことは書くでないぞとの達しでした。將校としても片目、片腕、片足をなくしたならば、あるいは台湾ぐらいいまでは後送されるかもしれないが生命の保証

までではできぬ、ということでした。

そういうことを聞いて、私はどうしたらいいかといろいろ考えましたが、思い当たらず、故郷に百円、家内にも百円を送ることにしました。そして中に「もう金の必要がなくなった」と書いて送れば、どうか何とか判断してくれるだろうと考えたからです。そして後日、私が内地へ帰ってから聞きますと、そのことが町の新聞に載ったということでした。

十月三十日、我が山砲隊にもフーコン作戦参加の命令が下りました。宣撫工作が効いたのか、出発するとき現地住民四〇―五〇人が「万歳！ 万歳！」と手を振って見送ってくれました。戦地であり、警備地の住民から、このように「元気で行ってください！」と送られたのは初めてのことでした。

当時フーコンの地は地図にない未開の地で、低湿の大密林で「死の谷」と呼ばれ、生きて再び帰れずと恐れられていたところでした。そして、そこには野生の象、虎、大蛇などが横行し、吸血虫の巣窟でもあり、

加えて野生の毒草が将兵を悩ませ、マリア、コレラ、アメーバ赤痢といったもののため、我が軍の戦力には非常な損耗をもたらしました。

そしてフーコンには、すでに歩兵第五十五、第五十六、第一一四連隊が敵と遭遇して、ニンビン川を挟んで戦闘を開始しておりました。そして私たち砲兵も歩兵と密に連携して戦闘を開始し、一時は有利に展開したのですが弾丸がありません。だいたい山砲は一日に一〇発で、これ以上は撃ってはいかんという制限があったのです。こちらが一発撃てば敵からは一〇〇発の返礼がきます。そして制空権は完全に奪われ、その空からは銃爆撃、高射角で迫撃砲がきます。また自動小銃には太刀打ち出来ず、斬込隊による戦法も何せ一対一〇個師団ではいかんともしがたく、陣地周辺の大密林も焼け野原となりました。

「菊」部隊はインパール攻略を有利にするため、印緬国境より来る英・印・支の大部隊をここで死守せよとの命令でした。しかし英印軍三個旅団はわれらの後方に空挺部隊を降下させました。我々は退路を断たれ

袋の鼠となり、悪戦苦闘四カ月、撃つに弾はなく食うに食なく、負傷者には薬もないという有様でした。そして雨期の築紫峠を脱出しようとの後退では、兵は「水をくれ」「殺してくれ」と言いつつ、生きながら腐れいく兵を置き去りにし、また共に働いてくれた愛馬も置き去りにせざるをえないという惨憺たる戦いでした。

このインパールの戦いに敗れ、我が友軍は総崩れとなり、死力を尽くしてシタン南下の最後の戦闘中に終戦の命が下りました。

我が軍は、勝ち誇る英印軍の心胆を寒からしめたことは事実です。しかしビルマ方面軍唯一の我が「菊」部隊も二方の犠牲者を出しました。

本当にビルマの戦いは第一線も後方もない戦いでした。生還者は一〇〇人に一人です。敗れたとはいえ、この赫々たる武勲と祖国の必勝を信じ護国の礎となつた英霊の偉功を後世に残すことこそ我々生還者の責務であり使命ではないでしょうか。

そして星霜三〇年の歳月が流れました。政府の遺骨収集団が現地に行かれた時、一人の老婆から野口軍医と河野獣医の消息を尋ねられたとのことでした。

「野口軍医はフーコンで戦死したが、河野はまだ健在」と伝えたところ、その老婆は涙を流し「会いたい、会ってお礼がしたい」と何度も繰り返したそうです。

その老婆とは、前に述べましたモーニンでの帝王切開した方でした。

その後互いに文通もし、「家族の写真も仏壇に備えて朝夕拝んでいます」との便りがありました。またいろいろ当時の記念の品々も送っていただきました。

思えば唯一人のビルマ人を助けたに過ぎませんが、人の命の尊さを感じないわけにはいきません。何処の人種であろうと心は一つ、ありがたいやら懐かしいやらでいっぱいです。またその便りには「日本の兵隊さん、本当にご苦労さんでした、ビルマの人々は決して日本を恨んでいません。会えるならラングーンまで迎えに参ります」との便りです。私は「日本とビルマの架け橋になれば幸いです」との返信を出しました。

これは私の体験のほんの一例に過ぎませんが、日本軍はまだまだ、あの戦禍の中にあっても、住民に対する数多くの思いやりを施してきたと思います。

十人十色、顔形も違うように考え方も違うでしょう。どう判断しようと結構ですが、私たち下級将校は命令のまま、また御国のため忠実に一生を捧げたのです。

日本の大東亜戦争により、東南アジアの諸国が独立の機運を作り出したことは事実です。有色人種は白人支配からの民族独立に一変しました。東アジアの諸国は全て独立国となり、また遠いアフリカの諸民族も独立し、自由を勝ち取っています。

そして今日、戦後解放された多くの国々で日本の犠牲的働きに深い敬愛の念が生じていることも事実であります。いつの世か、全世界の歴史の中に高く評価される時が来るであらうことを祈念致します。